

「グローバル人材養成プログラム」実践についての一考察

— グローバル人材養成講演会，グローバル人材養成授業，CompTIA CTT+ FD，
英語による英語授業に関連して —

小林 貢

A Study on Human Resource Development Program of National Institute of Technology, Akita College: On Global Competence Lecture Meeting, Global Competence Class, CompTIA CTT+ FD and Teaching English in English

Mitsugu KOBAYASHI

(平成27年11月30日受理)

It should be taken into consideration that e-learning, teaching English in English, and active-learning by native speaker are the essential tacklings for the Human Resource Development Program of National Institute of Technology, Akita College. In addition to that, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technolgy recommends students to deepen their learning of their special fields and to have the practical English abilities, which Washington Accord and MODEL CORE CURRICULUM of KOSEN also recognize one of necessary qualifications.

The purpose of this report is to suggest an approach to improve the spontaneous English abilities for our students and teachers by applying Human Resource Development Lecture Meeting and Human Resource Development Class and FD on the ways of thinking of CompTIA CTT+, Learner Autonomy, DeSeCo Key competency and JABEE.

We have been making many attempts to establish students' voluntary English learning and let them know the world-wide point of view for engineering design. If they keep studying their specialities autonomously and trying to communicate with foreigners in English, they can contribute to the world as international engineers.

Keywords : Global Competence Lecture Meeting, Global Competence Class, CompTIA CTT+ FD, Teaching English in English, Active-learning, e-learning,

1. 緒言

『グローバル人材養成プログラム』は、本校における英語教育の更なる推進を目的として、下記の4項目から構成されている。

1. 「国際教養大学教員による『グローバル人材養成講演会』及び『グローバル人材養成授業』
2. 「英語授業講義力強化プログラムFD」尚、平成26年度実施資料及び実施報告書については、高専機構教育研究調査室資料となっている。
3. 「モデルコアカリキュラムのためのプレゼンテー

ション演習」

4. 「英語による英語授業」

2. 「本校の英語教育について」

平成27年7月16日（木）、7月17日（金）に実施された平成27年度幹事監査の際に、作成した「本校の英語教育について」の特色ある内容については以下の通りである。

1. 本校の英語教育においては、英語学習に対するモチベーションを高める手段の一つとして英語に関

する資格試験の受験を奨励している。その経過として本校は平成11年度から平成19年度まで、9年連続して実用英語技能検定奨励賞に、平成20年度には優秀団体賞に、平成21年度には優良団体賞に、平成22年度及び平成23年度には奨励賞に、平成25年度においては優良団体賞に、平成26年度は優秀団体賞に選考された。

2. TOEICスコアについては以下の通りである。平成18年度において専攻科の評価指標である大学院におけるTOEIC平均スコア479点を超えた専攻科生は7名おり、最高点は635点であった。平成19年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの484点を超えた専攻科生は5名おり、最高点は660点であった。平成20年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの491点を超えた専攻科生は6名おり、最高点は745点であった。平成21年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの494点を超えた専攻科生は7名おり、最高点は855点であった。平成22年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの507点を超えた専攻科生は7名おり、最高点は720点であった。平成23年度においては基準が大学院4年の平均スコアに変更となり、平均スコア593点を超えた専攻科生は1名で、最高点は620点であった。平成24年度の大学院4年平均スコア614点を超えた専攻科生は5名で、最高点は700点であった。平成25年度の大学院4年平均スコア594点を超えた専攻科生は2名で、最高点は615点であった。平成26年度の大学院4年平均スコア605点を超えた専攻科生は0名で、最高点は570点であった。

3. 平成21年度高専改革推進経費採択事業（「国際性の向上に関する改革推進事業」予算配分は2年間）として、本校の人文科学系（英語）の「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」が、高専機構から選定された。プログラムの概要は、「e-learningによる英語学習に加えて外国人による専門分野に関する講演会により、TOEICに十分対応できる国際的に活躍できる人材の養成を図る。そして、情報発信の推進のための外国人によるライティングのプログラム『情報発信のためのLesson』の演習を行うことで、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成する。」である。プロジェクトの成果については、平成23年度に高専改革推進経費事例発表会（於：鹿児島大学）において発表し、『文部科学時報3月号』（2012年3月号）に掲載された。資料1として添付する。

4. 国際教養大学（以下、AIU）との連携につい

ては、平成26年度において、6月23日に「グローバル人材養成講演会」としてAIU Dr. Darren J Ashmore先生による英語による講演会「人形芝居」を実施した。そして、11月19日には5年物質工学科生物コースの「タンパク質工学」において授業担当教員とAIU Dr. Andrew Crofts先生による英語授業を実施した。平成27年度においては、7月22日に「グローバル人材養成講演会」としてAIU Dr. Patrick Dougherty先生による英語による講演会「Describing Japanese Customs in English」を実施する。

5. 平成26年度においてCompTIA CTT+を援用した授業を実施するための「英語授業講義力強化プログラムFD」を3回（5月23日（参加32名）、6月13日（参加25名）、10月7日（参加35名））実施した。後期授業に英語による専門授業を導入した。そして、「アクティブラーニングFD研修会」（平成27年3月19日（参加23名））を行った。平成27年度においては、新任研修を兼ねたCompTIA CTT+を援用した授業を実施するための「英語授業講義力強化プログラムFD」を2回（7月9日（参加10名）、7月14日（参加13名））実施している。

3. 「グローバル人材養成講演会」の実施について

上記でも触れたが、「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」の継続した取組として、平成26年6月23日（月）に、国際教養大学准教授Darren J. ASHMORE（ダレン・J・アシュモア）先生を講師にお招きして5年生全員を対象とした「人形芝居」の演題内容は、歴史の中において、人形は聖（神）と俗（日常）とのゲートウェイとして機能していたという日本的な「汎神論」の説明でしたが、イスラム教徒である留学生から神に対する認識が違うとの質問があり、まさにハンチントンの言う「文明の衝突」のような状況となりましたが、「多神教と一神教の違いを超えて、理解しあえるのがグローバル人材である」とコーディネーターの筆者が、話をまとめて「グローバル人材養成講演会」は無事に幕を閉じました。

平成27年度は、前年度の講演会においてイスラム教徒である留学生から「イスラム文化についての理解」という課題を戴いておりましたので、平成27年7月22日（水）に、国際教養大学のPatrick DOUGHERTY（パトリック・ドーティ）教授を講師にお招きして「Describing Japanese Customs in English」の演題で講演会を開催しました。本校で

は英語力強化のために国際教養大学との連携を進めているところですが、これはその一環として「グローバル人材養成講演会」と題し、5年生全員を対象としてドーティ先生に英語による日本文化とイスラム文化についての講演をして頂いたものです。学生は講演会を通して、グローバル社会における日本人としてのアイデンティティを再認識している様子でした。

今後もこのような機会を通して学生の英語力強化に努めていきたいと考えている。下の写真は講演の様子である。



また、以下はイスラム文化における伝統的服装についてのパワーポイントによる質問の例である。



このように異文化を理解し、また自らの文化を理解することは、グローバル人材を養成するためには必要不可欠であり、そのために機会を設けて5年生全員を対象とした「グローバル人材養成講演会」を今後も実施する予定である。

4. 「英語による英語授業」の実施について

平成26年度に実施した「英語による英語授業」については、本科1年通年英語Ⅰ、本科2年通年英語Ⅱ及び専攻科1年後期応用英語Ⅱにおいて実施した。「英語による英語授業」に関連して、平成26年6月13日に鶴岡高専から4名の教員と1名の職員を視察にお迎えして英語授業講義力強化プログラムFD(第2回)を実施いたしました。当日のスケジュールは下記の通りである。

1. 12:50~14:20 英語による英語授業見学(2Mの英語Ⅱ LL教室担当:筆者)
2. 14:30~15:10 懇談 A 会議室筆者…「英語について」担当
3. 16:10~2時間程度 FD見学 英語授業講義力強化プログラムFD(第2回)(講師:筆者)

筆者の「英語による英語授業」についての鶴岡高専の教員からのご意見は下記の通りである。

- (1) 学生が英語で行われる英語の授業に違和感を感じていないようだ。
- (2) コーラスリーディングの声大きい。
- (3) 教える側の熱意が十分に伝わってくる。
- (4) 学生に授業への集中力があり、英語の勉強へのモチベーションが高い。
- (5) 学生が教師の指示によく従っており、反応が良い。
- (6) 学生のほぼ全員が辞書を持っているのは実に感心である。
- (7) 学生に指示するときを使う英語がとても簡潔である。

平成26年度に実施した英語Ⅱ「英語による英語授業」は、教科書:「Perspective English CommunicationⅡ」第一学習社、問題集:「Deep Listening Level 2」日本英語検定協会、単語集:「カラー版TOEICテストにできる順英単語」中経出版を使用しました。授業の進め方として、「演習形式で行う。必要に応じて適宜小テストを実施し、また演習課題、レポート、宿題を課す。試験結果が合格点に達しない場合、再試験を行うことがある。」に基づき実施した。

上記の授業のように、リスニング教材を使用した時は、問題なく進行するのですが、教科書を使用し、文章の意味を確認する時には、コミュニケーションがうまくいかないこともありました。英語Ⅰにおいては、教科書:「English CommunicationⅠ」第一学習社、問題集:「英検準2級合格セミナー四訂版」旺文社、単語集:「カラー版TOEICテストにできる順英単語」中経出版を使用した授業で、授業の進め方

として、「演習形式で行う。必要に応じて適宜小テストを実施し、また演習課題、レポート、宿題を課す。試験結果が合格点に達しない場合、再試験を行うことがある。」に基づき実施した。この授業においても教科書や問題集を使用して、文章の意味を確認する時には、コミュニケーションがうまくいかないこともありました。

これらの問題を解決するために、平成27年度に実施した「英語による英語授業」については、筆者は、本科1年通年英語Iにおいて、週1回2時間リスニングを担当し、教科書：「スヌーピーと学ぶライティングとリスニングLIFE WITH SNOOPY」南雲堂、単語集：「カラー版TOEICテストにできる順英単語」中経出版を使用しました。「LIFE WITH SNOOPY」は、GRAMMMAR FOR WRITING, SENTENDES FOR WRITING, ENJOY SNOOPY, GRAMMMAR CHECK, WRITING (1)(2), TIPS FOR LISTENING, LISTENING (1)(2), SPEAKINGの項目から構成され、文法、作文、リスニング、スピーキングにおいて演習形式で「英語による英語授業」を実施するには特に問題がなく実施できます。ただ、ENJOY SNOOPYにおける漫画の意味を確認する時には、前期においてコミュニケーションがうまくいかないこともありました。後期においては、その問題を解決することを課題として「英語による英語授業」の実施を継続する。

専攻科1年後期応用英語IIにおいて平成26年度に実施した「英語による英語授業」については、教科書：「Preparation Course for the TOEIC Test」Akira Morita他 SEIBIDO、補助教材：「即戦ゼミ8 大学入試基礎英語頻出問題総演習」上垣暁雄編著 桐原書店を使用して、授業の進め方として、「演習形式で行い、2週に1回のペースで補助教材による単語小テストを実施する。尚、E-Learningは課題及び小テストに使用する。試験結果が合格点に達しない場合、再試験を行うことがある。」に基づき実施した。評価方法については、「合格点は60点である。後期試験結果を60%、単語小テストを10%、「TOEICテスト演習2000コース」小テストを10%、モデルコアカリキュラム(必須)を20%で評価する。」に基づき実施した。これについては、専攻科1年生が対象だったこともあり、特に大きな問題はなく実施できたと考えられる。平成27年度は、教科書：「Total Strategy for the TOEIC Test」Akira Morita 他 SEIBIDO、補助教材：「即戦ゼミ8 大学入試基礎英語頻出問題総演習」上垣暁雄編著 桐原書店を使用して「英語による英語授業」を実施する

予定である。平成27年度の評価方法については、平成26年度と同様である。

ループリック評価として、到達目標項目1としては、「国際的に通用するプレゼンテーション能力を修得するための英語によるコミュニケーションに必要な基本的能力が十分に身につけている。」ことを目標とし、到達目標項目2としては、「自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報や考えについて、200語程度の簡単な文章を書くことができることに加えて、自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報や考えについて、前もって準備をすれば毎分120語程度の速度で約2分間の十分な口頭説明ができる。」ことを目標とする。

平成27年度についても、専攻科1年生が対象であるため、特に大きな問題はなく「英語による英語授業」を実施したいと考えている。

5. 「平成26年度英語授業講義力強化プログラムFDについて」

平成27年3月18日に実施された平成26年度参加会の際に、作成した「平成26年度英語授業講義力強化プログラムFDについて」の内容については以下の通りである。

1. アクティブラーニング（以下AL）とは、学生による「書く・話す・発表する」などの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う能動的な学習であり、CompTIA CTT+（以下CTT+）は、ALによる「学習者中心の授業」が実施できていることを認定している国際資格である。
2. 高専機構の「平成25年度英語授業講義力強化プログラム」参加によりCTT+を取得した筆者は、学科の先生方が「英語による専門授業」を実施できるように、平成26年度に3回のFDを実施した。
3. 「学習者中心の授業」の概念を先生方にご理解戴き、学習者のペアワーク等を授業で実践して戴くためには、まず、CTT+の概要全てを一通り日本語でご理解戴いてから、どのように実践するのかを具体的に示すことが必要であった。
4. 平成26年（以下同年）5月23日に実施した第1回FDにおいて筆者は講師として、CTT+の概要全てについて具体的なQ&Aを含めた講義を行い、それから先生方に日本語を使用した「学習者中心の授業」をどのように実施するのかをご覧戴いた。
5. 6月13日に実施した第2回FDにおいて、英語教員である筆者は英語による授業のテキストを使用して英語による授業のCTT+実践シミュレーション

(全体質問, 挙手による回答, ペアへの質問, ペアワーク, 個別質問, 口頭による回答)を行い, 先生方にも英語による授業の実践を練習して戴いた。それに加えて, 筆者が学生達と撮影した「英語による英語授業」の映像を先生方にご覧戴いた。

6. 授業に参加した電気情報工学科4年の学生は, 「質問について学生同士でペアとなり相談することが新鮮であり, 質問についてよく考えることができた。英語の勉強にもなるので, 今後も機会があれば, 英語による授業を受けてみたい」とコメントしている。

7. 第3回FD実施前に, 本校の各学科代表の先生方4名: 機械工学科 野澤先生・電気情報工学科 駒木根先生・物質工学科 石塚先生・環境都市工学科 寺本先生に, 平成26年度後期授業に導入予定の内容について15分以内を目安に日本語パワーポイントと英語パワーポイントを作成して戴いた。

8. 筆者がパワーポイントをチェックして, 内容及び英語についてのフィードバックを作成し, 9月9日の第3回FDリハーサルにおいてフィードバックについて指摘して, 4名の先生方に内容及び英語を改訂して戴いた。

9. 10月7日に実施した第3回FDにおいて筆者はコーディネーターとして, 各学科代表の4名のプレゼンターによる英語授業発表会を開催した。発表会をご参観戴いた先生方からは「英語による専門授業」実施について温かいコメントを戴いた。

10. 各学科代表4名の先生方には平成26年度後期の授業において英語による専門授業を導入して戴き, その時の学生の様子についてもご報告戴いた。学生の反応は概ね好意的であった。来年度以降も「英語による専門授業」を推進するためには, 教員がALを更に理解し, 活用することが必要であるため, 筆者は, 今年度4回目のFDである「秋田高専アクティブラーニングFD研修会」を平成27年3月19日に実施する予定である。(予定通り実施し, 参加教員23名であった。)

6. 「平成27年度英語授業講義力強化プログラムFDについて」

標記についての実施については以下の通りである。

1. 英語授業講義力強化プログラムFD (第1回)
日時: 7月9日 (木) 16:10~17:30
場所: 合併教室
対象: 新任教員の先生方及び聴講を希望する先生方
内容: CompTIA CTT+におけるアプローチを援用した日本語による授業についてのFD

参加教員11名

2. 英語授業講義力強化プログラムFD (第2回)

日時: 7月14日 (火) 16:10~17:30

場所: テクノコミュニティ

対象: 新任教員の先生方, 英語授業発表会における各学科選出教員及び聴講を希望する先生方

内容: CompTIA CTT+におけるアプローチを援用した英語による授業についてのFD

参加教員11名

3. 英語授業発表会における日本語原稿完成

日時: 7月31日 (金) 17:00まで

対象: 各学科選出教員 (機械工学科 小林先生・電気情報工学科 中沢先生・物質工学科 鈴木先生・環境都市工学科 井上先生)

内容: 各学科選出教員による英語授業発表会における日本語原稿完成

4. 英語授業発表会における英語原稿完成

日時: 8月7日 (金) 17:00まで

対象: 各学科選出教員 (上記参照)

内容: 各学科選出教員による英語授業発表会における英語原稿完成

5. 英語授業講義力強化プログラムFD (第3回) リハーサル1

日時: 9月11日 (金) 午後1時~

場所: テクノコミュニティ

対象: コーディネーター (筆者) 及び各学科選出教員 (上記参照)

内容: 各学科選出教員による英語授業発表会リハーサル1

6. 英語授業講義力強化プログラムFD (第3回) リハーサル2

日時: 9月16日 (水) 午後3時~

場所: テクノコミュニティ

対象: コーディネーター (筆者) 及び各学科選出教員 (上記参照)

内容: 各学科選出教員による英語授業発表会リハーサル2

7. 英語授業講義力強化プログラムFD (第3回)

日時: 9月28日 (月) 午後1時~

場所: テクノコミュニティ

対象: 全教員

内容: 各学科選出教員による英語授業発表会

参加教員19名

各学科選出教員の先生方からは, 「とても勉強になりました。普段の講義や英語での学会発表にも役立ちそうです。」「英語での講義に自信がついた。」などのコメントを戴いた。先生方には授業に「英語

による専門授業」を導入いただく予定である。

7. 『「モデルコアカリキュラム」のためのプレゼンテーション演習』

『「モデルコアカリキュラム」のためのプレゼンテーション演習』としては自学自習時間を活用することで、「自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報や考えについて、200語程度の簡単な文章を書くことができることに加えて、自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報（例：実験成果など）や考えについて、前もって準備をすれば毎分120語程度の速度で約2分間の口頭説明ができ、且つ、相手が明瞭に毎分120語程度の速度で、繰り返しや言い換えを交えて話し、適切な助言、ヒント、促しなどが与えられれば、自分や身近なこと及び自分の専門に関する簡単な情報や考えについて口頭でやり取りや質問・応答ができる」である。これらのことが達成できるように平成26年度においては、「自己紹介」及び「研究内容」について演習させた。受講学生12名中11名の完成した内容については、パワーポイント及びビデオに記録した。平成27年度特別研究発表において2分間程度の英語による発表を実施する予定である。（平成26年度特別研究発表において2分間程度の英語による発表を平成25年度応用英語Ⅱ受講学生に実施させた。）それに加えて、平成27年度についても、専攻科生1年生が対象であり、モデルコアカリキュラムは、必須であるため、特に大きな問題を生じさせることなく『「モデルコアカリキュラム」のためのプレゼンテーション演習』を実施し、平成28年度特別研究発表において2分間程度の英語による発表を実施したいと考えている。

8. 「グローバル人材養成授業」の実施について

『グローバル人材養成授業：英語による専門授業「タンパク質工学」』においては、平成27年度は専門授業である「タンパク質工学」に関するネイティブの教員である国際教養大学 Andrew J. CROFTS 准教授が、DNAの構造と機能について平易な英語及びクリッカーを使用したアクティブ・ラーニングを実施することにより、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力及びプレゼンテーション能力の素地を養成するための授業を本科5年物質工学科生物コース学生を対象として平成27年11月16日7、8校時301教室にて実施した。4名の教員にご覧戴き、学生の感想は概ね好評であった。



9. まとめ

これまで述べてきたように『グローバル人材養成プログラム』は、本校における英語教育の特色ある要素であると考えられるので、試行錯誤を重ねながらも、学内での調整を行い、本校の創造教育支援経費等を活用して、今後も可能な限り、活動を継続して実施していく予定である。

参考文献

- 独立行政法人 国立高等専門学校機構 『モデルコアカリキュラム（試案）』 平成24年3月23日
 独立行政法人国立専門学校機構
 秋田工業高等専門学校
<http://www.ipc.akita-nct.ac.jp/index.html>
 CompTIA
<http://www.comptia.org/>
<http://www.comptia.jp/>
 福田誠治「フィンランドは教師の育て方がすごい」
 株式会社亜紀書房、(2009. 3)
 小林 貢『「英語教育とe-learning」実践についての一考察－過去を踏まえた現在と未来への視座から－』秋田工業高等専門学校研究紀要 第48号、pp.65-71. (2013. 2)
 小林 貢『「英語教育とe-learning」実践についての一考察Ⅱ－過去を踏まえた現在と未来への視座から－』秋田工業高等専門学校研究紀要 第49号、pp.56-61. (2014. 2)
 小林 貢『「英語教育とe-learning」実践についての一考察Ⅲ－過去を踏まえた現在と未来への視座から－』秋田工業高等専門学校研究紀要 第50号、pp.59-64. (2015. 2)